



【立志編】

家名捨てても理学選ぶ

1872（明治5）年6月、郷里・福岡（二戸）を離れた田中館の一家は、45日ほどかけて東京三田に移った。三田には慶應義塾があった。9月、17歳の愛橋は慶應義塾に入学し、英語を学び始める。

ところが翌年3月に福沢諭吉が「本来の学問を正則」、「間に合わせの学問を変則」と分けた大改革を行う。田中館は正則を学ぶが、月謝3円の負担は大きすぎ、9カ月で退学する。しかし福沢の薫陶は甚だしく、田中館は「私は福沢先生の直弟子だ」と後々まで語ったという。

天下国家に燃えていた田中館は、次

に官費入学できる工部大学校を目指すものの、「物を作る為の学問はくだらない」と思い直し、月謝の安い大学南校（後の開成学校）に志望を変える。そして開成学校から独立した英語学校に入学する。

夜明けと共に起き、冷や飯を食べ、神田一橋まで徒歩3時間の通学。しかし風雨の日などはさすがに困り、ついには神田などに安下宿を見つけて通った。

英語学校では校長の肥田昭作らから理学思想を聞かされた。このことが後年理学を選ぶ動機となった。

田中館は英語学校でフェントンに出



友人のように親しく交流した英国人英語教師フェントンと21歳のころの田中館愛橋（1877（明治10）年ごろ）（田中館愛橋記念科学館提供）

会う。6歳年上の英国人英語教師でアマチュア昆虫学者でもあった。実に紳士的な人物で多くの生徒から敬愛された。田中館はいつの間にか彼の助手的存在となり、夏休みには案内兼通訳として採集旅行に同行。友人あるいは兄弟のような間柄となる。

1876（明治9）年、東京開成学校予科三級生に進み寄宿舎生活を送る。生徒の中には政治家になり治国平天下の意気に燃える者も多く、田中館もまた政治家を夢見ていた。

しかし、東京大学予備門に進み、山川健次郎教授（後の東大総長）をはじめ、浜尾新教授（後の文部大臣、東大総長）らの薫陶を受けたことで、天下国家を論ずるだけが学問でないと感じ始める。

予科二年になった田中館は、本科の選択で欧米に比べ遅れている化学部門に進みたいと悩み始める。家族の期待を背負ってみたい。

二戸に戻った父稲蔵に「もし物理学を選べば、家名を上げることはできま

せん」と手紙で相談すると、稲蔵は「家名のことには気にするな」と答え、物理・数学を専攻させる。

「物理や科学なんか選んでどうやって飯を食うのか」とからかう友人たちに田中館はこう答えた。

「飯は茶碗と箸で食う。心配無用！」
（中村誠二 田中館愛橋会事務局長）

【ミニコラム】 “初物” 尽くし

福岡に蝶好きの外国人

1877（明治10）年、東京大学予備門で夏休み中の田中館はモダンな制服制帽姿で郷里に帰る。この時、英国人英語教師のフェントンと助手の石川千代松（級友で後の生物学者）も一緒であった。二人は昆虫採集が目的でやって来た。福岡の人々は大いに驚いたが、彼らを歓迎した。フェントンは蝶を探して「折爪岳に初めて登った外国人」、また「岩手県北で蜂に刺された最初の外国人」として知られている。